

<史料紹介>

山口県文書館所蔵アーカイブズガイドー学校教育編（7）ー

山本明史・和田秀作・浅川均・金谷匡人

山口県文書館では、所蔵資料を学校教育現場での活用という観点から捉えなおし、授業で活用しやすい形で提供する取り組みを平成 22 年度から行っている。その成果は、『山口県文書館研究紀要』第 38 号～43 号に掲載した。また利活用の促進を図るため、当館 Web サイトにも PDF の形式でアップロードしている。本稿はその続編である。

当館は、この資料集が文書館と学校教育現場をつなぐ架け橋となることを願っている。授業実践に関し、学校教育現場と情報の共有を図りたいと考えているので、資料の活用方法等について質問があれば、ぜひ当館に問い合わせていただきたい。

- 項目立ては東京書籍の中学校教科書『新しい社会 歴史』に準拠した。本稿のトピックの番号は、前稿からの通番とした。
- 原稿執筆にあたっては、No.162 ～ 164 を和田、No.165, 167, 168, 170 ～ 173, 175, 177, 178 を山本、No.166 を金谷、169, 174, 176 を浅川が担当した。
- 本稿を含め、現在のトピック数は 177 である。これまでのトピックを検索しやすいように教科書の項目との対応を一覧にしたのが P2 ～ 5 の表である。Web サイト上ではこの表から各トピックにリンクを貼っているので、日々の授業づくりにご活用いただきたい。

* Web サイトでは授業で活用し易いように、A4 用紙にそのままの形で出力できるようレイアウトしています。また、画像にはポップアップ機能をつけ、コピー可能な形式でアップロードしています。アーカイブズガイド学校教育編の Web サイトアドレスは <http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/index/page/id/524/>。スマートフォンやタブレット端末の方はこちらの QR コードからアクセスできます。



章	節	項	トピック名	掲載号
1	1-1 文明のおこりと 日本の成り立ち	1-1-1 世界の古代文明と宗教のおこり	エジプト文明	42号
			医聖ヒポクラテス	43号
			漢字の成立	43号
		1-1-2 日本列島の誕生と縄文文化	アザラシ・ド	43号
		1-1-3 弥生文化と邪馬台国	魏志倭人伝	44号
	1-2 古代国家の歩みと東アジア世界	1-1-4 大王の時代	中国・朝鮮との交流(好太王の碑文)	38号
			古墳文化(古墳の副葬品)	40号
		1-2-1 聖徳太子の政治改革	法隆寺	44号
		1-2-2 大化の改新	中臣鎌足(藤原鎌足)	44号
		1-2-3 律令国家の成立と平城京	和同開珎・皇朝十二銭	43号
			多賀城碑	43号
		1-2-4 奈良時代の人々のくらし		
		1-2-5 天平文化	国分寺の建立	43号
		1-2-6 平安京と東アジアの変化	菅原道真	43号
		1-2-7 摂関政治と文化の国風化	国風文化(源氏物語)	40号
2	2-1 武士の台頭と 鎌倉幕府	2-1-1 武士の成長	姓と名字	42号
		2-1-2 武家政権の成立	鎌倉幕府の始まり	38号
			執権政治(承久の乱)	40号
		2-1-3 武士と民衆の生活	武士の生活(女性の地頭)	39号
			犬追物(いぬおうもの)	42号
	2-2 東アジア世界 とのかわり と社会の変動	2-1-4 鎌倉時代の文化と宗教	鎌倉文化(平治物語絵巻)	40号
		2-2-1 モンゴルの襲来と日本	モンゴルの襲来(文永・弘安の役)	38号
		2-2-2 南北朝の動乱と室町幕府	南北朝の動乱	38号
			室町幕府の発展(足利義満)	40号
			東アジアの変動(倭寇)	38号
		2-2-3 東アジアとの交流	東アジアの変動(倭寇)	38号
		2-2-4 産業の発達と民衆の生活	村の自治	42号
		2-2-5 応仁の乱と戦国大名	応仁の乱	38号
			応仁の乱(足輕の活躍)	41号
			戦国大名の登場と城下町(分国法)	39号
	3-1 ヨーロッパ人との 出会いと全 国統一	2-2-6 室町文化とその広がり	室町文化(連歌)	40号
		3-1-1 キリスト教世界とルネサンス		
		3-1-2 ヨーロッパと外の世界		
		3-1-3 ヨーロッパ人との出会い	キリスト教の伝来	38号
		3-1-4 織田信長・豊臣秀吉による統一事業	信長の統一事業	38号
			豊臣秀吉	42号
		3-1-5 兵農分離と朝鮮侵略	朝鮮侵略(肥前名護屋城)	38号
		3-1-6 桃山文化	茶の湯	38号
		3-2-1 江戸幕府の成立と支配のしくみ	幕府権力の確立(大阪の陣)	39号
			大名の統制(武家諸法度)	38号

章	節	項	トピック名	掲載号
3 近世の日本	3-2 江戸幕府の成立と鎖国	3-2-2 さまざまな身分とくらし	参勤交代(江戸から萩まで)	43号
			身分の統制(万治制法)	38号
			村と百姓	39号
			厳しい身分による差別	40号
		3-2-3 貿易の振興から鎖国へ	鎖国(かろうた渡海停止)	38号
			宗門改	39号
		3-2-4 鎖国下の対外関係	出島	42号
			アイヌ民族との交易	38号
			朝鮮と琉球王国(朝鮮通信使)	39号
	3-3 産業の発達と幕府政治の動き	3-3-1 農業や諸産業の発達	農業の進歩	38号
			寛永通宝	39号
			諸産業の発達(捕鯨)	40号
			藩政時代の漁業(「水産慣例原稿」)	42号
		3-3-2 都市の繁栄と元禄文化	三都の繁栄	38号
			生類憐れみの令	38号
			連歌から俳諧へ	40号
			塵劫記(算術の普及)	44号
			年中行事(正月の歳徳神と門松)	44号
		3-3-3 享保の改革と社会の変化	享保の改革(上米の制)	38号
			医業知識の普及(『普救類方』)	43号
		3-3-4 田沼の政治と寛政の改革	寛政の改革(出版の統制)	38号
			江戸時代のききん	38号
			ロシアの接近	38号
			財政難に苦しむ諸藩(藩札)	40号
		3-3-5 新しい学問と化政文化	蘭学(解体新書)	38号
			蘭学の発達(「紅毛雑話」)	42号
			オランダ語学習	42号
			教育の広がり(寺子屋)	38号
			伊能忠敬	39号
			滑稽本(「東海道中膝栗毛」)	40号
			古文辞学と国学	40号
			錦絵と忠臣蔵	40号
			伊勢参りと往来手形	40号
			大相撲の興行	42号
		3-3-6 外国船の出現と天保の改革	異国船打払令	40号
			大塩平八郎の乱	38号
			雄藩の成長(特産物 蠟[ろう])	40号
			反射炉	44号
			洋式軍艦の建造	44号

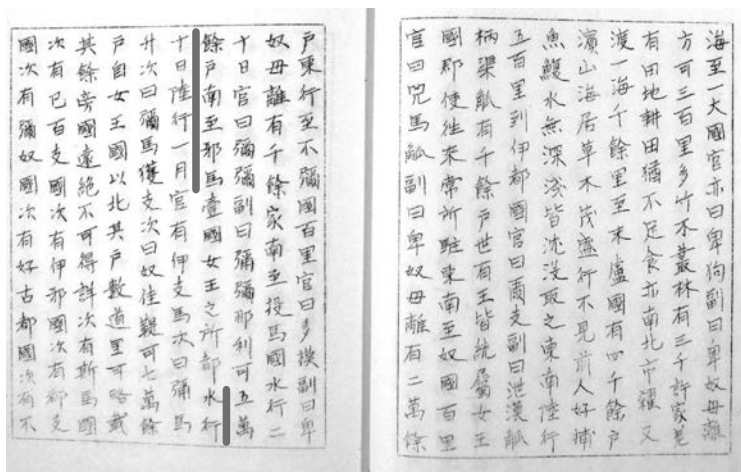
章	節	項	トピック名	掲載号
4 開国と近代日本の歩み	4-1 欧米の進出と日本の開国	4-1-1 近代革命の時代		
		4-1-2 産業革命と欧米諸国		
		4-1-3 ヨーロッパのアジア侵略	アヘン戦争	38号
		4-1-4 開国と不平等条約	開国(日米和親条約)	38号
			日米修好通商条約	38号
		4-1-5 江戸幕府の滅亡	吉田松陰	39号
			下関戦争(四国艦隊下関砲撃事件)	38号
			幕末の風説書	42号
			「鼓譜」(軍隊の西洋化)	43号
			討幕の密勅	38号
			戊辰戦争とトントンヤレ節	40号
	4-2 明治維新	4-2-1 新政府の成立	五箇条の誓文・政体書	38号
			藩から県へ(木戸孝允)	40号
			廃藩置県	39号
			身分制度の廃止	40号
		4-2-2 明治維新の三大改革	近代的軍制の成立(徴兵告諭)	38号
			地租改正(地券)	38号
			学制の公布(学制公布当初の教科書)	39号
			学制の公布(小学校の開設)	41号
			お雇い外国人「ムルドル」	44号
		4-2-3 世界とつながる日本と文明開化	新しい貨幣	41号
			太陽暦の採用	41号
			文明開化(牛乳の奨励)	39号
			福沢諭吉(「世界国尽」)	42号
		4-2-4 岩倉使節団と殖産興業	岩倉使節団	38号
			鉄道の開通	44号
			殖産興業(富岡製糸場伝習生の募集)	38号
			銀行の開業(第一国立銀行小切手帳)	44号
			内国勸業博覧会	43号
			北海道の開拓(屯田兵募集)	39号
			閣龍(コロンブス)世界博覧会(万国博覧会)	41号
		4-2-5 近代的な国際関係	郵便制度の創設	42号
			征韓論(佐田白茅と横山安武)	41号
		4-2-6 自由民権運動の高まり	琉球処分	41号
			不平士族の反乱(西南戦争の電報)	38号
			高まる自由民権運動(新聞紙条例)	39号
			国会開設の勅諭	41号
			伊藤博文	42号
			大日本帝国憲法発布	39号

章	節	項	トピック名	掲載号
		4-2-7 立憲国家の成立	帝国議会の開設(衆議院議員選挙)	43号
			ボアソナードと民法典論争	41号
			地方制度の整備(地方自治体としての郡)	41号
			教育勅語	41号
			初期議会と条約改正	41号
	4-3 日清・日露戦争と近代産業	4-3-1 欧米列強の侵略と条約改正	条約改正の実現(治外法権の撤廃)	40号
			大津事件(条約改正)	41号
		4-3-2 日清戦争	日清戦争(清国船への警戒)	39号
			下関条約(春帆楼写真)	39号
			三国干渉(遼東半島還付の詔勅)	41号
			立憲政友会山口県支部の創立	40号
		4-3-3 日露戦争	日英同盟(日英博覧会絵ハガキ)	39号
			日露戦争(軍事郵便)	39号
		4-3-4 韓国と中国	満鉄の設立	39号
			韓国の植民地化(朝鮮総督府)	40号
			孫文	43号
		4-3-5 産業革命の進展	八幡製鉄所の設立	43号
			産業の発展と鉄道の建設(鉄道競争すごろく)	38号
			外国航路の開拓	43号
		4-3-6 近代文化の形成	学校教育の普及(戦前の試験問題)	38号
			学校教育の普及(夜学会)	42号
			近代スポーツの導入(野球規則)	38号
			「国民之友」と「日本及日本人」(徳富蘇峰と三宅雪嶺)	41号
			活動写真	44号
			新しい文章(与謝野晶子)	42号
			日本の美と欧米の美(狩野芳崖)	42号
	5-1 第一次世界大戦と日本	5-1-1 第一次世界大戦	第一次世界大戦(青島市街詳図)	39号
			第一次世界大戦ポスター	41号
		5-1-2 ロシア革命	シベリア出兵	42号
		5-1-3 国際協調の高まり		
		5-1-4 アジアの民族運動	朝鮮の独立運動(三一独立運動)	40号
		5-1-5 大正デモクラシーと政党内閣の成立	大戦景気	40号
			米騒動	39号
		5-1-6 広がる社会運動と普通選挙の実現	小作争議	39号
			関東大震災	41号
			大衆文化の発展(ラジオ放送の普及)	39号
		5-1-7 新しい文化と生活	大衆文化の発展(ヨヘイ画集)	40号
			大衆文化の発展(少女雑誌の創刊)	42号

章	節	項	トピック名	掲載号
5 二度の世界大戦と日本			読書週間	44号
			鉄道網の整備(山陰本線の全通)	44号
			乗合バスの普及	44号
			一歩さきゆく自然保護(周南市八代のナベヅル)	44号
	5-2 世界恐慌と日本の中国侵略	5-2-1 世界恐慌とブロック経済		
		5-2-2 欧米の情勢と日本	昭和恐慌からの脱出模索(時局匡救事業)	40号
		5-2-3 日本の中国侵略	五・一五事件	39号
			満州国(首都「新京」観光地図)	38号
			二・二六事件	44号
			重化学工業の発達(海底炭坑の伸長)	41号
		5-2-4 日中全面戦争	戦時体制の強化	38号
			強まる戦時体制(衣料切符)	40号
	5-3 第二次世界大戦と日本	5-3-1 第二次世界大戦の始まり		
		5-3-2 太平洋戦争の開始	戦時色の深まり(大日本国民体操)	38号
			大東亜共栄圏	38号
		5-3-3 戦時下の人々	軍隊漫画絵はがき	38号
			物資の欠乏(陶貨)	39号
			金属製品の供出	41号
			山野草の活用	41号
		5-3-4 戦争の終結	空襲(家庭防空)	39号
			空から見る本土空襲の傷跡(米軍撮影空中写真)	38号
6 現代の日本と世界	6-1 戦後日本の発展と国際社会	6-1-1 占領下の日本	教育の民主化(墨塗り教科書・仮とじ教科書)	38号
		6-1-2 民主化と日本国憲法	日本国憲法の制定	39号
			あたらしい憲法のはなし	43号
			民主政治の確立(県政だより)	39号
		6-1-3 冷戦の開始と植民地の解放	国際連合の誕生	41号
		6-1-4 独立の回復と55年体制		
		6-1-5 緊張緩和と日本外交		
		6-1-6 日本の高度経済成長	東京オリンピック聖火リレー	43号
			高度経済成長(日本万国博覧会)	39号
			大量消費社会の到来	41号
			公害問題(大気汚染測定車「おおぞら号」)	42号
	6-2 新たな時代の日本と世界	6-2-1 冷戦後の国際社会		
		6-2-2 変化の中の日本		
		6-2-3 よりよい未来に向けて		

*網掛けした部分は本号のトピックです。

No.162 魏志倭人伝



* 御蘭生翁甫文庫 656「魏志抄 倭人伝」

【解説】

中国が魏・蜀・呉の三国に分かれて争っていた3世紀、日本列島には女王卑弥呼が治めていた邪馬台国という国がありました。

その様子を伝える貴重な資料が「魏志倭人伝」（正確には『三国志』のなかの『魏志』30 東夷伝の倭人条）です。

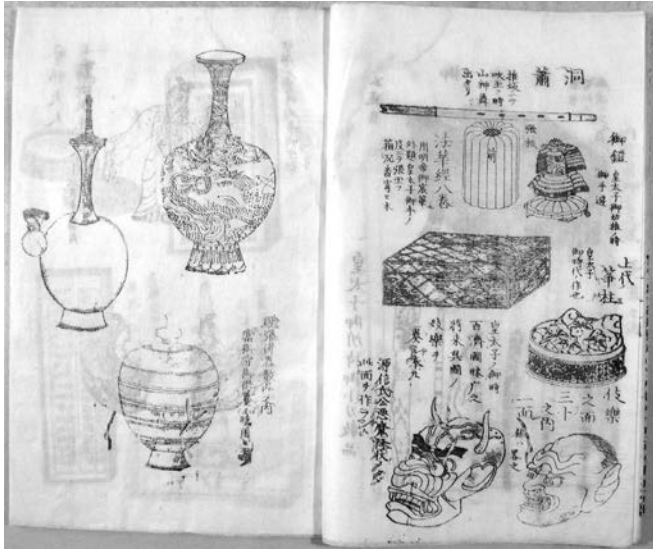
内容は、三つに大別され、帯方郡から倭に至る道程とその周辺国、倭人の風俗習慣、魏と倭国との交渉について記されています。特に邪馬台国の位置に関する記事は古くから注目を集めており、その解釈をめぐることは、江戸時代から現在まで数えきれない説があります。

その中でも有力なのが九州説と近畿説で、「魏志倭人伝」に記された方角を重視すれば前者が、距離を重視すれば後者が有利だとも言われています。

この点に関して、同時代の文献の用例と比較・検討した場合、「水行十日陸行一月」という距離をあらわす記述は「水行十日」と「陸行一月」ではなく、「水行十日」or「陸行一月」と解釈すべきだという説もあります。また、「魏志倭人伝」に記された、山に「朱」（水銀）があつて、倭人が身体に「朱」を塗っていたという記事に注目し、水銀の産地が限られることから、邪馬台国の位置を探ろうとする研究もあります。



No.163 法隆寺



* 出羽家文書 436
「御宝物図絵」

【解説】

法隆寺は、7世紀のごく初めに仏教を中心とする国を作ろう

とした聖徳太子が建てた寺です。火災により焼失しましたが、再建されました。のち聖徳太子を仏と同一して帰依し供養する太子信仰の中心となりました。釈迦三尊像は飛鳥文化の代表的な作品とされており、建造物は1993（平成5）年にユネスコの世界文化遺産に登録されました。

法隆寺に伝わった宝物は、江戸時代に江戸と京都で2度ずつ一般公開されています（出開帳）。

写真は、1842（天保13）年に伽藍修復の資金集めを主目的として、江戸の回向院で一般公開された際に作られた法隆寺宝物の絵入りの解説書（図録）です。ここには、この時公開された115件の宝物の内88件が図示されており、83件は1878（明治11）年に法隆寺から皇室に献納されました。さらに太平洋戦争後に国へ移管されて、現在は東京国立博物館の法隆寺宝物館に保管されています。これらの宝物は、正倉院宝物と双璧をなす古代美術のコレクションであり、8世紀の作品が中心である正倉院宝物よりも古い7世紀の宝物が数多く含まれていることから高い評価を受けています。

* 当館には、江戸時代以降に出版された法隆寺伽藍図として、安部家文書1437・1449、山田家文書（徳山市）414などがあります。

No.164 中臣鎌足（藤原鎌足）

* 松原文書 398「藤原鎌足公像」

【解説】

中臣鎌足（なかとみのかまたり：614～669）は、古代の中央貴族・政治家です。645年に中大兄皇子（なかのおおえのおうじ：後の天智天皇）らと共に蘇我氏を倒して大化の改新を推進し、内臣（うちつおみ）に任じられて律令体制の基礎を築きました。臨終に際し、天智天皇から大織冠（たいしょくかん）という当時の朝廷で最高の冠位と藤原の姓を賜りました。鎌足の子孫がのちに摂関政治を行った藤原氏です。



この中臣鎌足の墓と考えられているのが大阪府高槻市にある阿武山古墳です。1934（昭和9）年に古墳と棺に埋葬されていたミイラが偶然発見された際には、科学的な調査は行われず埋め戻されました。しかし、その時にひそかに撮影されたX線写真やサンプル的に採取された遺物を手掛かりに、約50年後に調査がなされた結果、金糸をまとったミイラは鎌足である可能性が高いとされました。

X線写真を分析すると、この人物は、骨ががっしりしていてスポーツマンのような体をしており、いわゆるスポーツ肘もありました。ここからは、馬を馳せ、弓の練習をおこたらない体格のよい人物といった姿が浮かび上がってきます。また死因は、落馬か高い所から落下するなどの事故によって、脊椎・腰椎を損傷し、下半身不随のまま肺炎・尿路感染症などの二次合併症を起こしたと推定されています。

写真は、中島松堂という人物が描いた鎌足の肖像です。両手で笏を執り、半跏踏み下げの姿勢で腰かけるという、鎌足像でよくみられる姿勢です。

* 当館には、鎌足を祖先とする系図として、内藤家文書（神奈川県）39、高洲家文書 191 などがあります。

No.165 塵劫記（算術の普及）



* 県庁伝来旧藩記録 775「塵却記（木版）」

【解説】

元禄時代には自然科学の発達が見られました。数学の分野では関孝和（せきたかかず）が出て和算を発達させ、また吉田光由（よしだみつよし）は「塵劫記（じんこうき）」を著し、算術を庶民に広めました。

塵劫記には、数の数え方から始まって、九九、算盤の使い方、図形の面積の求め方など多くの例題が収められています。豊富なイラストと分かりやすい文章で書かれており、以後、長い間算術の入門書として広く用いられました。

九九の表では「 $2 \cdot 3$ が6」に対する「 $3 \cdot 2$ が6」のような入れ替えがないなど、現在私たちが親しんでいるものとは少し異なっています。

写真左上は塵劫記の例題として著名な鼠算、右上は屋敷の周りに堀を掘って盛り土をした時の高さを求める問題の部分です。

* 算術の入門書として親しまれた塵劫記には、数多くの類本が作成されました。写真は「寿福塵劫記」で1797（寛政9）年に刊行されたものです（小田家（金屋）文書と漢407）。



No.166 年中行事（正月の歳徳神と門松）

* 野村家文書 5「庄屋許年中行事」。伊勢神宮の大
麻・洗米・昆布・扇子・
ユズリハ・にらみ鯛・橙・
スルメ・串柿・イワシ・大根・
宝袋・カナハカリ（天秤か）
などが記されています。



【解説】

正月や盆などの年中行事は、江戸時代には庶民も盛んに行うようになりました。正月には縁起のよい方角（恵方）に歳徳棚を釣って「歳徳神」を迎え、その年の福德を祈りました。上の写真は、近世に吉敷村（現山口市）の庄屋等を務めた野村家で、明治初年ごろ歳徳棚に供えられた縁起物です。上には描かれていませんが、中央には鏡餅が置かれ、周囲にはしめ縄が張られたことでしょう。

一方、右の写真は、カド（玄関の前庭）に立てられた門松と、その周囲でおめでたい文言を唱え、その家を祝福する「万歳（まんざい）」の様子です。門松は薪や割木に挟んで立てられました。

子どもたちは、鞠（まり）・凧（たこ）・突羽子（羽根つき）などで遊びました。



* 吉川家文書 307「万歳図」。万歳のように、家々を回って門口で行う芸能を「門付け（かどつけ）」といいます。

No.167 反射炉



* 文書館図書 726-58-312
「絵はがき 山口県萩史
跡・反射炉遺跡」

【解説】

反射炉は高温で鉄を精錬することのできる溶解炉です。大砲などの製造には反射炉で精錬した質の良い鉄が必要でした。

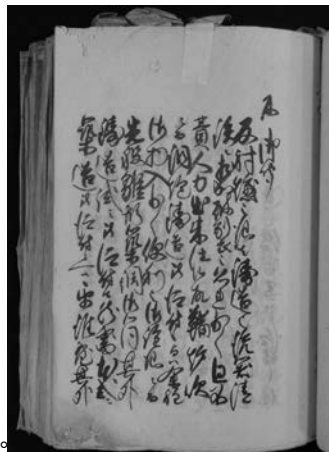
オランダからもたらされたこの技術を導入し、初めて実用化に成功したのは肥前藩です。幕府は肥前藩との技術交流により葦山（静岡県）に反射炉を築き、また薩摩藩などでも、外国船に対する軍備を強化するために、反射炉が作られ大砲

などが製造されました。

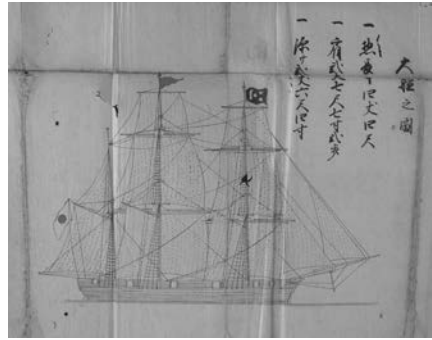
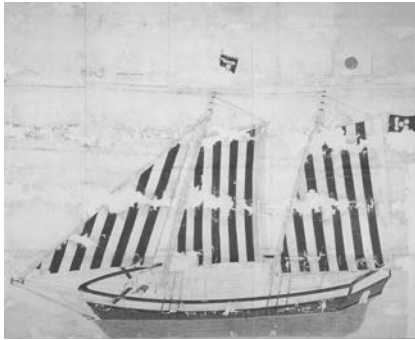
写真は現在も萩市に残る反射炉の大正時代ごろの姿です。近年、この反射炉は実用炉ではなく、大砲を鑄造し軍備増強を目指す長州藩が肥前藩の反射炉を手本に試験的に作ったものであったと考えられています。

2015(平成 27) 年 7 月、この反射炉は「明治日本の産業革命遺産—製鉄・製鋼、造船、石炭産業—」の一つとして世界文化遺産に登録されました。

* 写真は毛利家文庫「部寄」の 1856（安政 3）年の記事で長州藩の反射炉が本式のものではなく「雛形」（試作）であったことが記されています。資金難により本式の反射炉の建設は断念されました（毛利家文庫 32 部寄 4 [安政 3 年 11 月 19 日]）。



No.168 洋式軍艦の建造



- * (左) 丙辰丸 (毛利家文庫 15 文武 99「丙辰丸製造沙汰控」)
(右) 庚申丸 (毛利家文庫 15 文武 100「大艦製造一件沙汰控」)

【解説】

幕府はペリー来航を機に、西欧の海軍に対抗するため、1853（嘉永6）年9月大船建造の禁を解き諸大名に対し造船を奨励しました。

長州藩では1856（安政3）年に軍艦の建造を決定し、ロシア式の技術を用いて「君沢形」の「スクーネル（スクーター）」を建造し、完成した年の干支から「丙辰丸」と名付けられました。

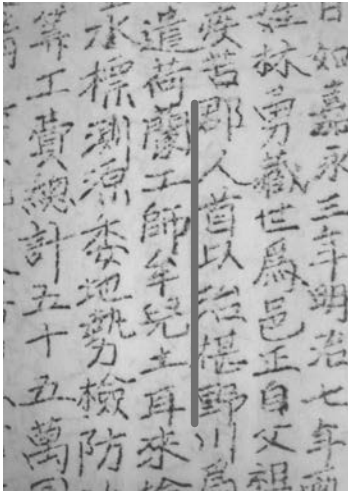
君沢形というのは幕末に君沢郡戸田村（現在の静岡県沼津市）などで建造された西洋式帆船の形式です。1854（嘉永7）年の安政東海地震の津波により、ロシア船ディアナ号が大破した際、帰国用の代船がロシア人乗組員の設計のもと戸田村とその周辺の船大工らによって建造されました。これは日本で建造された初の本格的な西洋式帆船（2本マストのスクーター）で「戸田号」と名付けられました。戸田号建造に当たった人々により、その後同型の西洋式帆船が建造され、これらの形式の船は、建造地の郡名から「君沢形」と呼ばれました。

長州藩では、つづいて1860（万延元）年にオランダ式の技術を用いて庚申丸が建造されました。

- * 右は「丙辰丸」「庚申丸」の二つの軍艦を建造した恵美須ヶ鼻造船所の絵図です（毛利家文庫 15 文武 99「丙辰丸製造沙汰控」）。



No.169 お雇い外国人「ムルドル」



* 富田家文書3「榎野川修工記」(部分)
榎野川修工記念碑の碑文を写しとったものです。

【解説】

「お雇い外国人」とは、近代国家の形成を急ぐ日本が、近代的な制度や技術を学ぶために、欧米諸国から招き入れた外国人指導者のことです。

県央部の吉敷郡を貫流する榎野川は、長雨になると毎年のように堤防が決壊して、流域の民家や田畑に大きな被害をもたらす「暴れ川」でした。

明治期になり、地元の有力者(林勇蔵・吉富簡一・本間源三郎ら)で組織された「榎野川改修联合会」の嘆願をきっかけに、内務省による榎野川の治水工事が実施されることになりました。

1880(明治13)年に現地を実見して、工事の青写真を描いたのが、内務省土木局の御雇治水工師であったオランダ人ムルドル(ムルデル)です。当時、国内各地の砂防工事や河川・港湾整備にはオランダ人技術者集団がその手腕を発揮していたのです。

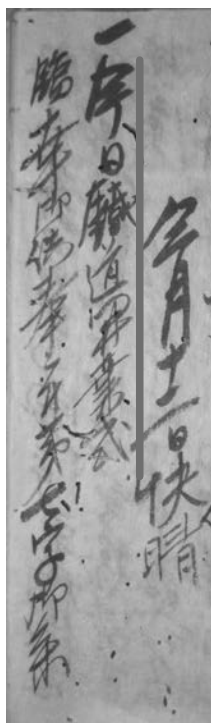
海外留学で洋式土木技術を学んだ内務省技師の田辺義三郎(長州出身)らの指導のもと、1884年に着手された、砂防工事・川幅拡張・護岸工事・導流堤(支川の合水流を矯正する施設)設置などの治水工事が竣工したのは1896年のことでした。

ムルドルの名は、河川改修工事のあしどりを記した榎野川修工記念碑に「牟児土耳」と刻まれています。県内では、1889年に下関の港湾整備の指導にもあたっています。

* 関連する資料として、県庁戦前A総務1486「榎野川改修联合会決議書」、県史編纂所史料466「榎野川記 林勇蔵存之(写)」、行政資料30内務3「匡救土木事業 榎野川改良工事誌 第1輯」などがあります。写真は榎野川修工記念碑です。



No.170 鉄道の開通



* 毛利家文庫 5 忠愛公 113 「元徳公時代日記 四」
「同月十二日 快晴」
— 今日鉄道開業式（以下略）

【解説】

明治政府は殖産興業を進めるために、経済の発展に欠かせない交通の整備に力を入れ、1872（明治5）年9月12日、新橋・横浜間の鉄道営業を開始しました。

長州の旧藩主毛利元徳夫妻の日々の動静を記した日誌には、鉄道開業式へ参列した様子が詳しく書かれています。

当初、開業式は重陽の節句に合わせて9月9日の予定でした。9月4日に宮内省式部寮から参列時の服装についての指示があり、「直垂着用、帯剣」と和装での参列が命じられましたが、大雨のため12日へ延期するとの連絡が8日の晩にありました。

開業式当日、この日は快晴で、元徳は朝7時に参内。9時に天皇に随い馬車で新橋駅へ行き、10時発の汽車で横浜へ。横浜で開業式が行われた後、午後1時に新橋に戻り、新橋でも式典が行われています。この日は一般の人々にも駅や延遼館（当時の迎賓館）などの観覧が許されました。

元徳は午後3時30分にいったん帰宅しましたが、5時に再び新橋駅の見物に出かけています。

* 写真は1921（大正10）年に鉄道開業50周年を記念して作成された絵はがきで、開業当時の汽車の時刻表と運賃が紹介されています。東京（新橋）と横浜を53分で結び、上等が金1両2朱、中等が金3分、下等が金1分2朱でした（佐倉谷家文書95）。



No.171 銀行の開業（第一国立銀行小切手帳）



* 徳山毛利家文庫 用達所出納簿 295「第一国立銀行切手帳」

【解説】

国立銀行は日本最初の近代的な銀行で、アメリカのナショナルバンクをモデルに、1872（明治5）年制定の国立銀行条例に基づき設立されました。兌換銀行券の発行権を持つ銀行で、明治初年に多量に発行された不換紙幣（太政官札など）の整理と、殖産興業のための資金供給を目的としていました。

1873（明治6）年に渋沢栄一を頭取として開業した第一国立銀行ほか、横浜第二・新潟第四・大阪第五の4行がまず設立されました。1876（明治9）年の国立銀行条例改正を機に各地に国立銀行が設立され、その数は153におよびました。その後1882（明治15）年の日本銀行設立に伴い、その大半が普通銀行に変わり、各地の中核的な銀行となっていました。今日でも「第四銀行」（新潟）や「第百十四銀行」（香川）など、銀行名に国立銀行時代のナンバーを残すものがあります。

写真は1874（明治7）年2月17日に発行された第一国立銀行の小切手帳で、旧徳山藩主毛利元功所用のものです。第一国立銀行が開業して間もないころの小切手帳で、同年2月から翌年6月まで、通し番号の24番まで使用されています。冒頭に小切手を用いた振り出し方の説明があり、「記入する時は同じ書風を用いること」などの注意事項も書いてあります。

* 写真は道源銀行の小切手帳です。道源銀行は1897（明治30）年に現在の周南市に設立された銀行で1916年（大正5）年に加島銀行に買収されました。これは1898（明治31）年のものです（勝間田家文書 894「道源銀行当座小切手帳」）。



No.172 活動写真



* 梶山家文書 1789「最大最新の発明機械 活動写真の説明」

【解説】

1893（明治26）年、エジソンは動く映像を覗き見る機械（キネトスコープ）を発明しました。これにヒントを得たフランスのリュミエール兄弟は、投影機を用いてスクリーンに

大きく映し出す機械（シネマトグラフ）を発明しました。エジソンも自身の発明したキネトスコープを改良し、投影機を用いて動画を映す「バイタスコープ」を発明しています。

これらの発明品は、間を置かずに複数のルートを通じ、日本へ紹介されました。貿易商柴田忠次郎は、アメリカからバイタスコープを持ち帰りましたが、これを用いた上映会を1897（明治30）年3月6日から東京神田のホール（錦輝館）で開いています。写真はその説明用のチラシです。発行者は「電気作用活動写真会」で、新しい発明品に対する興奮が次のように綴られています。

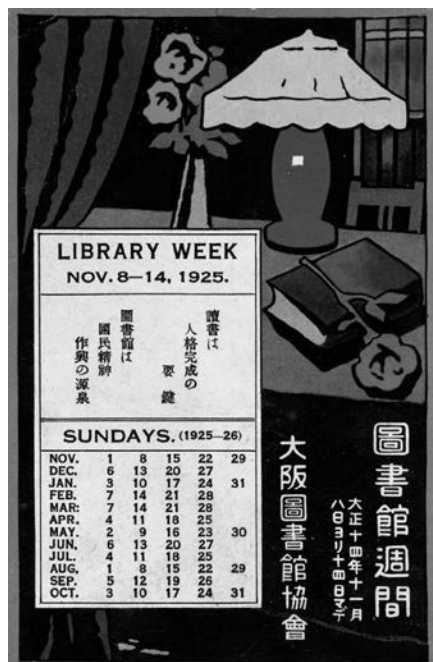
此の機械において妙中の妙、奇中の奇、とも称すべきは、禽鳥の翔飛するに当たり羽毛翩々として動き、餌を啄ばむに当たっては嘴を動かし、獣犬の吼ゆるに当たっては牙を噛んで怒り、走れば四足動くなどとして真に逼らざるものはなく、就中風景の美、習俗の細に至るまで実物と毫も異なることなし

また、以下の7番組のタイトルとその簡単な内容を紹介しています。

- (1) 露国皇帝即位戴冠式、(2) メリー女王、(3) エチソン氏工作場前撥水の景、
- (4) ナイヤガラ瀑布、(5) 群鳩飼養の図、(6) ニューヨーク火事禍の景、
- (7) 李鴻章伯ウオールドホテルを去るの図

上映に必要な電気については、政治家で実業家の十文字信介の協力を得て、彼から発動機を借り受けました。それが縁で弟の十文字大元はこの後、東京で活動弁士として活躍しています。チラシの末尾には十文字信介が自筆で案内の文を書いています。

No.173 読書週間



* (右) 佐倉谷家文書 1102 「図書館週間」
(左) 田村哲夫文庫 1108 「絵はがき 大阪図書館
協会 図書館週間」

【解説】

現在、毎年10月27日から11月9日までを「読書週間」としています。

その始まりは1924（大正13）年で、日本図書館協会が「図書館週間」を制定したのが最初です。写真左はその翌年、大阪図書館協会が実施した図書館週間の絵葉書です。「LIBRARY WEEK」と、英語のロゴが入った色彩豊かなデザインが印象的です。スローガンには「読書は人格完成の要諦」「図書館は国民精神作興の源泉」とあり、人格形成における読書の意義が強調されています。

一方、写真右は1937（昭和12）年、戦時下における図書館週間PRのしおりで「国民精神総動員」「読め！国力涵養のために」と、読書が国力増強と結び付けられています。

このあと、1939年に「読書普及運動」と改称され、1941年にいったん廃止されましたが、戦後、1947年（昭和22）年に「読書週間」として復活しました。

No.174 鉄道網の整備（山陰本線の全通）



- *（左）三村家文書 3「萩線建設概要」（工事中の惣郷橋梁）
- （右）三村家文書 20「全通記念絵葉書」（大津郡深川町発行）

【解説】

明治・大正・昭和を通じ、地域振興のよりどころとして、人々は鉄道敷設を渴望していました。1933（昭和8）年2月、須佐・宇田郷間の開通により山陰本線が全通し、山口県の海岸部が鉄路でつながりました。

全通を祝って各地で発行された絵はがきには、鉄道に寄せる沿線住民の期待がにじみでています（写真右上）。鉄道開通の日、萩市長は、その祝辞のなかで、大陸への航路整備を要望しています。人々の次なる熱い視線は、鉄路の先の朝鮮・満蒙にまで向けられることとなったのです。

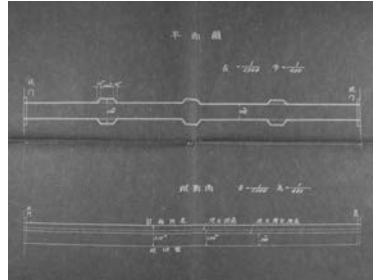
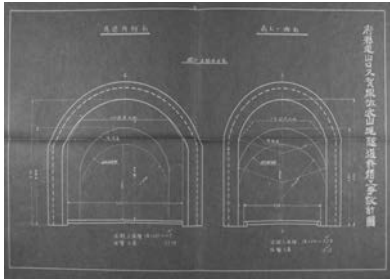
海辺まで険しい山がせり出したこの区間には、山陰本線最長の大刈隧道（全長2215m）が建設されました。さらに、白須川河口には、沼地状の軟弱な地盤を克服し、日本海から吹き寄せる強烈な風波に耐えうる橋梁の建設が求められました。こうして設計されたのが惣郷橋梁です（写真左上）。

波打ち際の景勝地をゆるやかに大きくカーブする全長約190mのこの橋梁では、通過する車輛のレール音と大海原の波音がつむぎだす音風景を味わうことができます。

* 惣郷橋梁橋脚部（現状）。強度と耐久性を高めるために橋脚にはラーメン構造（鉄筋コンクリートの柱による格子状の構造）を採用しています。



No.175 乗合バスの普及



＊戦前戦後土木部 20「柳井・室津・平生・虹ヶ浜間省営自動車一件」。
佐波山トンネルの拡張工事の設計図です。

【解説】

山口県内の乗合バスは、1918(大正7)年、防長自動車株式会社が萩駅・篠目村間の営業を開始したのが始まりで、その後しだいに増加し、大正末には約 100 社となり県下全域に及びました。

昭和期に入ると、鉄道省が省営バス路線を計画したことに伴い、県下各地から鉄道大臣あてに予定路線編入の請願が相次いでなされました。

県内最初の省営バス路線は、1931(昭和6)年に開設された三田尻(防府)・山口間の「三山線」でした。これは全国で二番目の省営バス路線で営業成績も順調でした。1933年には萩まで延長され、山陰・山陽を結ぶ自動車連絡幹線となりました。その後、岩国・日原間、山口・於福間、柳井・岩国間、光・室積間なども相次いで開設され、乗合バスは人々にとって日常不可欠の交通機関になっていきました。

路線拡充に伴い、道路の整備も必要となりました。写真は佐波山トンネルの拡張工事の図面です。佐波山トンネルは1887(明治20)年に山口・防府間の勝坂峠に掘られたトンネルでしたが、省営バスの営業に伴い、517 mと長く狭いこのトンネルの通行に支障が出てきました。そのためトンネルの高さを高くし、途中で待避所を3箇所設け、離合をしやすくするなどの改修が加えられました。

その後、自家用車の所有が本格化する昭和40年代に佐波山に新トンネルが掘られ、上下4車線となりました。

＊リーフレット昭和 48-22「一般国道 262 号 佐波山隧道開通 昭和 48 年 9 月 18 日佐波山隧道」



No.176 一步さきゆく自然保護（周南市八代のナベヅル）



- * (左) 明治期山口県布達類 220-36「山口県布達書 明治 20 年県令号」
 (右) 文書館図書 462-36「天然記念物調査報告〔動物之部 第一輯〕」

【解説】

八代盆地に冬の訪れを告げる使者，ナベヅル。八代での日々のいとなみのかたわらには，越冬のため，遠くシベリアから飛来して，田地で悠然とエサをついばむナベヅルの姿がありました。

近代化が進み，古来の日本の風物や記憶が急速に失われていくなか，古建築や美術工芸品は，1896（明治 29）年に制定された「古社寺保存法」によって保存の途が講じられていたのに対して，史蹟や天然記念物の喪失にブレーキをかける制度は整えられていませんでした。1919（大正 8）年の「史蹟名勝天然記念物保存法」制定を受けて，1921 年，「八代のツル及び渡来地」は国の天然記念物に指定されることになりました。

上の写真（左）は，八代に飛来したツルの禁猟を定めた県知事の通達（1887 年）で，近代日本における「自然保護」「動物愛護」の最初期の事例と言われているものです。

八代は「ツルの里」として観光ルートに組み入れられていたこともありました。近年の自然環境の激変によりピーク時には 355 羽を数えたツルの飛来数の減少が問題となっており，種の保存のため，飛来地の分散化が図られています。

* 佐倉谷家文書 63「観光絵葉書」



No.177 二・二六事件



* 新聞文庫 大阪朝日 59
「大阪朝日新聞号外」

【解説】

1936（昭和11）年2月26日早朝、皇道派青年将校らは武力による国内改革をめざし、首相官邸・警視庁などを襲撃し、内大臣斎藤実、大蔵大臣高橋是清、教育総監渡辺錠太郎を殺害し、侍従長鈴木貫太郎に重傷を負わせました。その後陸軍省・参謀本部・国会・首相官邸などを占拠しましたが、翌日戒厳令が布かれ、29日に鎮圧されました。

クーデター自体は失敗に終わりましたが、この後、統制派軍部の発言力が増し、軍備の拡張が一層進められました。

写真は、事件後の報道規制が緩和された翌月22日に事件の詳細を報じた大阪朝日新聞の号外です。事件当日の様子



子が関係者の証言を交えて記されています。写真下は人違いにより難を逃れ、奇跡的に救出された岡田首相の様子が書かれている部分です。

* 当館新聞文庫に、二・二六事件翌日の大阪朝日新聞の紙面の複製があります（新聞文庫 その他1）。